

金融庁勉強会資料

習近平 3 期目の指導部人事

2022 年 12 月 14 日

稲垣 清

報 告 内 容

I 20 回党大会の概要と特徴

1. 習近平政治報告のポイント
2. 党大会の概要と特徴
3. 中央金融系代表と 20 期中央委員・候補委員
4. 習近平 3 期目の人事

II 20 回党大会人事

1. 政治局常務委員（トップ 7）
2. 政治局委員
3. 中央委員・候補委員
4. 中央紀律員委員会
5. 中央軍事委員会

III 党大会後の人事

1. 政治局常務委員の兼務職予想
2. 地方書記—政治局委員人事
3. 国務院人事

IV 習近平 3 期目を支えるリーダー—Who' s Who

1. 「70 後」リーダー
2. 有望リーダー—Who' s Who
3. 中国人民銀行候補者

I 20 回党大会の概要と特徴

1. 習近平の政治報告のポイント

党大会初日、習近平総書記による「政治報告」が行われた。2017年の習近平による「政治報告」は3時間以上に及んだが、20回大会では、1時間15分にとどまった。「報告」は72ページに及ぶものといわれ、習近平は原稿の半分を読み上げただけといわれる。しかし、「政治報告」で強調したのは、「中華民族の偉大な復興」であり、その文脈で、「台湾の武力統一を放棄しない」という強い決意である。そして、「中国式現代化」の実現も強調し、そのために、自らの任期も、向こう5年はもとより、終身をも辞さない姿勢を垣間見るものがある。

習近平「政治報告」のポイント	
➤	長期政権を意識した内容（「人民領袖」と周辺は持ち上げる）
➤	「強国」（「中国式現代化」）建設
➤	貧困問題の解決と「共同富裕」（10年の評価と目標）
➤	「ゼロコロナ政策を絶賛-継続」
➤	「汚職腐敗」摘発の徹底
➤	台湾統一への強い意志と対米牽制（「武力解放」について言及）
➤	経済指標について触れず（四半期統計発表の延期-大幅減速の恐れ、「質の高い成長」を強調）

I-1 表 習近平の長期展望

	年齢	目標	備考
2017年党大会（2期目）	64歳	2020年～35年に社会主義現代化を基本的に実現	後継指名なし
2022年党大会（3期目）	69歳	中国式現代化の実現 共同富裕の実現	慣例を破って、3期目に入る (後継候補指名なし)
2027年党大会（4期目？）	74歳		建軍100周年
2032年党大会（5期目？）	79歳		
2035年	82歳	社会主義現代化の実現 (「党規約」にも盛り込む)	軍の現代化実現
2049年（建国100年）	96歳	社会主義現代化強国の実現	米国と肩を並べる

党規約改正にみる習近平への忠誠

20 回党大会における主要議題の一つが党規約の改正であった。当初、規約の中に、「偉大な領袖」「人民の領袖」なる呼称が採用されるとの観測もあったが、さすがに、これには党内での異論があったものと思われ、規約には盛り込まれなかった。

さらに、これまでの指導思想は、「**習近平**新時代中国特特色主義**思想**」という長い表現を、「習近平思想」に短縮する、これは、単なる表現の修正・短縮ではなく、習近平の指導思想としての権威付けを狙ったものである。しかし、今回の党規約改正では、これも採用されず、従来の表現にとどめた。

「7 中全会」のキーワードとなった「二つの確立」も見送りとなり、「二つの擁護」（習近平の核心としての地位と、習近平を中心とする党中央の権威を守る）が党員の忠誠心として、明記され、さらに、「台湾独立に反対」が盛り込まれた。

党規約改正の趣旨は、長期政権を目指す習近平への忠誠心を党員および党中央を求めたことに、習近平としての思惑を果たせたとと言える。その「権威」の表れがトップ人事に反映され、その人事には、何人たりとも異議を唱えさせない、との強い決意をしめした。閉幕式での、「胡錦濤退出劇」もそのことを如実に示しているといえよう。

2. 党大会の概要と特徴

2 表 党大会日程と大会の焦点

	大会日程	7 中全会 (党大会準備総会)	大会の焦点 (トップ人事)
16 回	2002 年 11 月 8 日～14 日 (7 日間)	11 月 3 日～5 日 (3 日間)	胡錦濤、総書記に就任 (1 期目) トップ 9
17	2007 年 10 月 15 日～21 日 (7 日間)	10 月 9 日～12 日 (4 日間)	胡錦濤、2 期目。最高指導部に習近平、李克強の次世代リーダーが入る。曾慶紅は退任。トップ 9
18	2012 年 11 月 8 日～14 日 (7 日間)	11 月 1 日～ 4 日 (4 日間)	習近平、総書記就任 (1 期目) トップ 7、「60 後」は政治局委員に 2 人。
19	2017 年 10 月 18 日～24 日 (7 日間)	10 月 11 日～13 日 (4 日間)	習近平体制 2 期目 党規約改正 (「習思想」盛り込む) 王岐山は退任、「60 後」も常務委員入りなし。トップ 7

20	2022年10月16日～22日 (7日間)	10月9日～11日 (4日間)	<p>習近平体制3期目(異例 — 「習一強」)</p> <p>李克強、汪洋らの退任、「ポスト・習」人材は丁薛祥ひとり、ただし、明確な後継メッセージではない。</p> <p>「二つの確立」は明記したものの、「習思想」と主席制は見送り</p>
----	--------------------------	--------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

注：公式発表に基づいて、筆者作成。

20 回党大会の選挙単位別内訳

政治局会議の決定に先立って、20 回党大会の 38 の選挙単位別代表 2300 名の選出が完了し、38 単位のうち、台湾、香港、マカオを除く 38 選挙単位の代表名簿が公表された。38 の選挙単位別内訳は、ほぼ 19 回大会と同じである。

20 回党大会の選挙単位数は、前回の 40 から、38 に減っているが、これは、「中央」（中央直属機関）と「中央国家機関」が前は別々の選挙単位であったが、今回は一緒になったこと、同様に、「解放軍」と「武装警察」が一緒になったことによる。なお、「中央和国家機関」は前回より 2 名少ない、293 名となったが、「解放軍・武装警察」は 25 の小選挙単位から、前回より 1 名多い、304 名（全体のシェアは前回と同じ 13.2%）が代表として選出されている。

「中央企業系（在京）」も前回より 2 名減となったが、「中央金融系」は前回と同じ 44 名が代表となっている。この「中国金融系」の代表の中に、習近平の側近の一人である何立峰（1955 年生、中央委員、国家発展改革委員会主任、全国政協副主席、20 回党大会で、政治局委員に選出された）が入っていることが注目される。何立峰は本来であれば、「中央国家機関」からの選出であるが、なぜか、「中国金融系」からの選出となっている。何立峰は党大会で、政治局委員に昇格したが、2023 年 3 月の全人代において、金融担当の副総理（前任の劉鶴政治局委員、國務院副総理）に就任するとの情報があり、そのことを裏付ける証左となっている。

20 回党大会代表の最終決定

2022 年 9 月 25 日、中央は、20 回党大会代表の最終名簿を公表した。総代表数は、当初の 2300 名から、資格検査ののち、2296 名が正式代表と決定した。4 名が代表の資格を停止されたことになる。その 4 名は、甘肅省代表の周偉（省委常委委員・秘書長）、黒龍江省代表の高晶超（女、チャムス品種植合作社理事長）、張兵（浙江省嘉興市元書記）、そして、解放軍代表の尚宏（19 期中央委員・戦略支援部隊副司令員）である。

この4名のうち、周偉は、7月死亡（自殺とみられている）によるものであるが、残る3名はいずれも、腐敗（汚職）などによる資格停止処分によるとされている。なお、周偉という名前は、最終名簿にも掲載されているが、同性同名の人物がもうひとりおり、こちらは、江蘇省昆山市書記の周偉（1974年生）である。

解放軍代表の尚宏（1960年生・中將）は19期中央委員であり、代表資格停止の理由は不明である。ちなみに、19回党大会では、2287名のうち、7名が資格停止となり、最終代表は2280名であった。

3表 20回党大会代表の諸特徴

	19回	20回	比率
女性代表	551	619	27.0%
少数民族代表	-	264	11.5%
末端党员（生産現場）	-	771	33.6%
専門技術者	-	266	11.6%
世代構成（55歳以下）	-	1371	59.7%
大学卒レベル	-	2191	95.4%
入党年次（1979年以降）	-	2224	96.9%

注：9月25日、党中央発表数字をもとに作成。

4表 20回党大会代表の選挙単位別内訳

	17回代表数	18回代表数	19回代表数	%	20回代表数	%
31地方	1518	1557	1576	68.5	1576	68.5
解放軍	248	251	253	13.2	304	13.2
武警部隊	47	49	50			
中央直属機関	313	108	109	12.8	293	12.7
中央国家機関		184	186			
中央金融系統	40	42	44	1.9	44	1.9
中央企業系統（在京）	47	52	53	2.3	51	2.2
全国台湾聯宜会	25	28	(29)	(1.3)	10	(1.4)
香港工作委員会					11	

澳門工作委員会						
合計	2213	2270	2300	100.0	2296	100.0

注：17回「中央直屬機関・中央国家機関・台湾聯合会」の代表名簿は公表されていないため、計算値である。「台湾聯合会」は16回の選挙単位であるが、17回、18回もこれを踏襲しているものと判断した。18回は28名が台湾、香港とマカオの代表と発表されている。19回および20回は、選出代表総数からの差額計算値である。

3. 中央金融系代表と20期中央委員・候補委員

金融界代表の特徴

党大会における38単位のうち、「中央金融系」代表は19回と同じ、44人であり、18回に比べ、いずれも2名の増員であった。内訳は、銀行界から32人（銀行業監督管理委員会を含む）、保険業界5人、証券業界1人、金融集団（中信と光大）から2人、中国投資有限責任公司1人となっており、銀行業界が72%を占め、圧倒的に多い。基本的な構成は19回と同じである。

大型国有銀行は中国工商銀行、中国農業銀行、中国銀行、中国建設銀行の4つが「四大商業銀行」と呼ばれているが、20回大会では、いずれも、董事長が代表として選出されている。中でも、中国農業銀行は、総勢5人が選出されている。なお、中国農業銀行出身者の政界への進出が目立っており、農業銀行は金融界の“黃埔軍校”という異名を誇っている。

44人のうち、女性は19回と同じく、8人（18.2%）、少数民族出身者も19回と同じ、3人（6.8%）である。代表のほとんどは董事長、行長、主席などの幹部であるが、末端の銀行員なども含まれており、その数は8人である。

なお、「中央金融」の代表のひとりに、何立峰（1955年生）が入っている。現職は国家發展改革委員会主任、全国政協副主席であり、習近平の福建省時代の部下であり、ブレーンの一人である。何立峰は本来であれば、「中央国家機関」からの選出であるが、なぜか、「中国金融系」からの選出となっている。何立峰は次期党大会で、政治局委員に昇格し、2023年には、金融担当の副総理（現在の劉鶴政治局委員、國務院副総理）に就任するとの情報があり、そのことを裏付ける証左となっている。

中国人民銀行の現行長の易綱（1958年生、中央候補委員）は年齢制限、「2期10年」の原則からいえば、再任の可能性が高いとみられていたが、コロナの影響を受けて、経済後退の現状打破の意味でも、一心し

て、新総理を支えるための交代も予想される。その場合には、人民銀行内からの昇格の可能性が高く、副行長の潘功勝（1963年生）が昇格するものと思われたが、潘功勝は、党大会代表には、選出されたものの、中央委員および候補委員にも選出されていない。

中国銀行保険監督管理委員会主席の郭樹清（1956年生、中国人民銀行党委書記、副行長）も交代する可能性も高く、易綱の横滑りという人事もありうると思われていた。しかし、易綱は、党大会代表（「中央金融系」）には選出されたものの、中央委員には選出されず、その可能性も消えた。

郭樹清、易綱の両人が中央委員に選出されなかったということで、次の銀監会および人民銀行長人事は、2023年3月の全人代における国务院人事の大きな焦点の一つとなるであろう。

5表 中央金融系代表の単位別内訳

	19回	20回	20期中央委員候補	20回党大会代表	20期中央委員・候補委員
中国人民銀行	5	3	3	易綱行長、潘功勝副行長、陳雨露（前副行長）	
国家開発銀行	2	1	1	貴州省分行処長	
中国輸出入銀行	1	1	1	吳富林董事長	
中国農業發展銀行	2	1	1	錢文揮董事長	
中国工商銀行	5	4	4	陳四清董事長、廖林行長、ウルムチ支店、浙江台州支店	○廖林（1966・行長）
中国農業銀行	5	5	5	張青松（行長）、龍雲（市支店長）	○谷澍（1967・董事長）
中国銀行	3	2	2	劉連舸（董事長）支店長	
中国建設銀行	4	4	4	董事長・行長 末端行員2人。	○張金良（1969・副董事長）
交通銀行	1	1	1	任德奇（董事長）	○劉琚（1972・行長）
招商銀行	1	0	0		○繆建民（1965・招商局集團董事長）

中信集団(中信銀行)	-	-	1	朱鶴新董事長	○朱鶴新(1968)
光大銀行	1	1	1	副董事長・總經理	
銀行保険監督管理委員会	2	3	3	郭樹清(主席・人民銀行副行長)、文治成(湖北分局科長)、湖北省分局	
保険界	6	2	2	中国人民保険、中国人寿(白濤董事長)	○蔡希良(1966・中国人民保険総裁)
証券監督管理委員会	1	1	1	易会満(主席)	◎易会満(1964・主席)
国有金融集団	2	1	1	中国投資有限責任公司	
先物取引	2	1	1	大連商品取引所	
計	44	44	44	所属不明3人を含む	

注：◎は中央委員、○は中央候補委員を示す。

4. 習近平 3 期目の人事

党大会における中央委員・候補委員の選出手順

毎期の党大会において、中央委員および中央候補委員が選出される。中央委員の定数は決まっておらず、過去 3 期でみると、200 名前後である。中央候補委員も同じであり、150 名から 170 名が選出されている。

中央委員と中央委員候補の違いは、以下のように言われているが、正式文書があるわけではない。

- ・ 中央委員の発表は筆面順（地方の書記・省長、國務院大臣クラス、軍司令官など）
- ・ 中央委員候補は得票順に発表される。中央委員に欠員が生じた場合、上位当選者から順に繰り上げ選出される（中央委員候補は、地方副省長、國務院副部長クラス）。
- ・ 中央委員は中央委員会総会での投票権を持つが、中央委員候補は投票権を有しない、といわれている。

中央委員・候補委員ともに、任期が 5 年であり、「3 選禁止」などの規則はない。ただし、任期途中で解任されるケースはよくある。

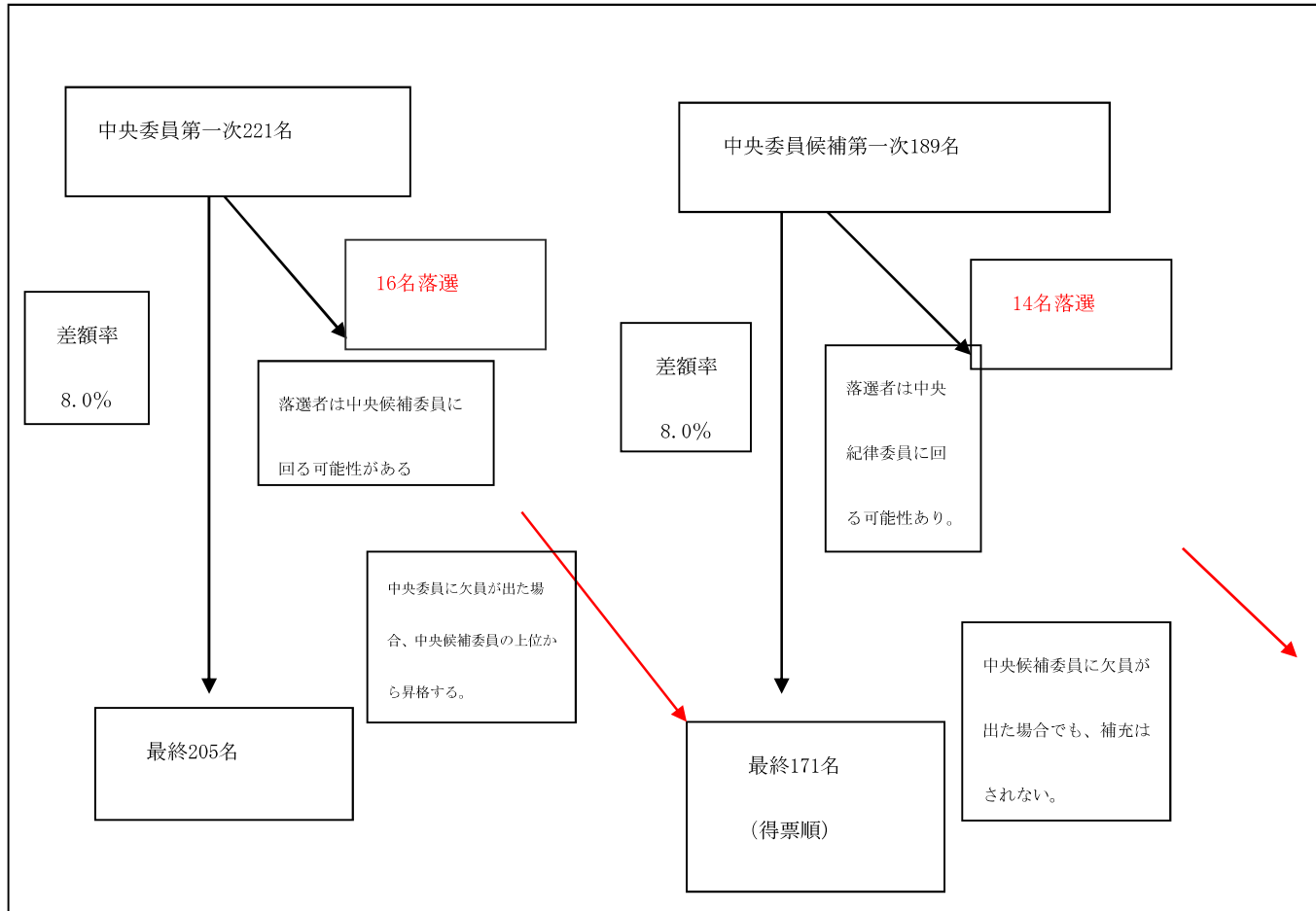
2022年10月21日に開催された党大会主席団第3回会議において、中央委員、中央候補委員および中央紀律委員候補者名簿（草案）が提出され、審議のうえ、最終日の22日の閉幕日において、最終的に確定した。20期中央委員は19期に比べ、1名増の205名、発表によると、差額率8%による選挙が行われたとい、推定によると、その仕組みは、1図のようであったものと推定される。なお、差額率は、19期の8.8%とほぼ同じであった。

6表 20期中央委員・候補委員・紀律委員

	19期（2017年）	20期（2022年）	増減
中央委員	204	205	+ 1
中央候補委員	172	171	-1
中央紀律委員	133	133	-

注：19期、20期ともに、選出時の人数である。

I-1 図 20 回党大会における中央委員・候補委員選出のしくみ（推定）



注：筆者推定（拙著『中南海』2015年、岩波新書）。

7表 20期中央委員・候補委員の出身別構成の推移

	18期(2012年)		19期(2017年)		20期(2022年)		
	中央委員	中央候補	中央委員	中央候補	中央委員	中央候補	合計
党中央	20	1	20	1	30	2	32 (8.5)
国務院	49	18	49	18	33	9	42 (11.1)
軍	41	18	41	18	43	18	61 (15.7)
地方	64	103	64	103	75	88	163 (43.4)
企業	7	19	7	19	1	26	27 (7.2)
その他	24	11	24	11	23	28	51 (13.3)
合計	205	170	204	172	205	171	376 (100.0)

注：各期の人数は選出時による。「その他」には、全人代、政協、司法、大学、諸団体などのトップが含まれている。中央委員および中央候補委員名簿にもとづいて、筆者分類整理作成。

世代別構成をみると、7表のとおりである。中央委員および中央候補委員ともに、「60後」（1960年代60歳台）が中核世代であり、全体の7割を超えている。さらに、「60後」のうち、1962年、63年、64年生が、36名、40名、そして33名と集中しており、「60後」の7割を占めている。このように、中央委員は、19期に比べ、「50後」（1950年代）が大幅に減少しており、世代交代が進んでいることを如実に表している。20期は、「50後」がまだ、38名選出されているが、ここでは、物議を醸している「上七八下」の原則がほぼ完徹しており、68歳以上の委員はわずか3名である（習近平、張又峽、王毅）。

しかし、将来を担う「70後」（1970年代）は19期と同様に、中央委員では、未だに選出されていないが、中央候補委員は、19期のわずか2名から35名の大幅に増加している。この中には、将来のトップリーダー候補と目されている、諸葛宇傑（1971年生、上海市副書記）、時光輝（1970年生、貴州省副書記）、楊普柏（1973年生、北京市副市長）らが含まれている。次期、党大会（2027年）には、中央委員に昇格するであろう。

習近平は、異例の3期目の総書記に就任し、後継者の明確なメッセージを示していない。それどころか、2035年（習近平は82歳）の「社会主義現代化の実現」という長期目標を定め、そこまで権力を掌握しかねない状況でもある。それでもなお、後継者を育てて行かなければならない。その対象となるのは、もはや、「60後」ではなく、「70後世代」となることも必至である。

8表 19期・20期の中央委員・中央候補委員の世代構成比較

	19期		20期		増減	
	中央委員	中央候補委員	中央委員	中央候補委員	中央委員	中央候補委員
「50後」	161 (78.9)	17 (9.9)	38 (18.5)	0	-123	-17
「60後」	41 (20.1)	137 (79.7)	167 (81.5)	128 (74.9)	+126	+ 9
「70後」	0	2	0	35 (20.5)	-	+33
年齢不詳	2	16	0	8	-	-
合計	204 (100.0)	172 (100.0)	205 (100.0)	171 (100.0)	+1	-1

9表 中央委員の年齢別構成の推移

生年	17期(2007年)		18期(2012年)		19期(2017年)		20期(2022年)	
	年齢	人数	年齢	人数	年齢	人数	年齢	人数
1940年	67	5	72	0	77	0	82	0
41	66	4	71	0	76	0	81	0
42	65	14	70	0	75	0	80	0
43	64	2	69	0	74	0	79	0
44	63	22	68	0	73	1	78	0
45	62	17	67	0	72	3	77	0
46	61	20	66	0	71	5	76	0
47	60	17	65	0	70	7	75	0
48	59	10	64	0	69	1	74	0
49	58	13	63	0	68	12	73	0
50	57	12	62	9	67	22	72	1
51	56	11	61	7	66	17	71	0
52	55	5	60	4	65	21	70	0
53	54	8	59	11	64	31	69	2
54	53	6	58	17	63	22	68	0
55	52	6	57	31	62	19	67	7
56	51		56	21	61	11	66	5
57	50	7	55	30	60	10	65	9
58	49		54	13	59	2	64	2
59	48		53	15	58	2	63	12
60	47	2	52	13	57	2	62	12
61	46		51	5	56	2	61	16
62	45		50	10	55	1	60	36
63	44	2	49	5	54	2	59	40
64	43		48	10	53	1	58	32
65	42		47	0	52		57	10
66	41		46	0	51		56	3
67	40		45	1	50	1	55	4
68	39		44	0	49		54	2
69	38		43	0	48		53	2
70	37		42	0	47		52	
71	36		41	0	46		51	
72	35		40	0	45		50	

「60後」が中核世代

注：各期とも、中央委員のみの集計。

II 20 回党大会人事

1. 政治局常務委員（トップ7）

中国共産党を執政党とする中国、その最高意思決定機関が、党中央政治局常務委員である。過去の人数は、15 期（1997 年）は 7 人であったが、16 期から 17 期（胡錦濤体制）までは、9 人であったが、18 期（習近平体制）から再び 7 人となり、20 期も同じであった。

常務委員の人数は、12 期（1982 年）は偶数の 6 人であった。6 人の中には、当時の軍事委員会主席・顧問委員会主任の鄧小平が入っており、党内秘密決議で「最終的な判断は鄧小平同志が行う」という決定があったからである（注）。その後は、基本的に奇数を前提としているが、それは「多数決原理」（「機関決定」）を原則としているからである（注：政治局会議での決定は全会一致を原則としており、多数決で決めることはない、という情報もある一朝日新聞中国総局『紅の党』完全版、292 頁）。

17 期 9 人の常務委員のうち、習近平と李克強を除く 7 人は、年齢制限（中国の最高指導者の「定年」は 70 歳であるが、実際には、67 歳前後が引退年齢）と「3 選禁止」（「党行政指導幹部職務任期暫行規定」、2006 年 8 月）によって、引退を余儀なくされるため、18 期党大会人事の最大の焦点は、その補充メンバーの顔ぶれであった。最後の最後まで、「7 人か 9 人か」で競いあったが、最終的に 7 人で決着した。

過去の党大会の人事面からみた特徴でみると、2017 年 19 回党大会は 2002 年と同じであり、ナンバーワンである総書記はじめ、政治局常務委員の大半が入れ替わることになった。

予想外の人事

20 回党大会は、「習一強」を内外に宣言する大会であった。特に、注目のトップ人事は、大方の予想を覆す内容であった。党大会閉幕直前の 10 月 18 日、香港サウスチャイナモーニングポストは、李克強、汪洋の退任予想を報道したが、それまでは、大方のみるところ、習近平の 3 期（事実上の「68 歳定年制」を覆す）への就任は予想したが、李克強、汪洋（ともに、「1955 年生」、留任した王滬寧も対象）は留任、しかも、要職に就任するとの見方が支配的であった。

しかし、3 人のうち、王滬寧一人が残るという結果となり、李克強、汪洋は退任することになった。後に、「一部の同志は、自ら辞任を申し出た」と公式報道されたものの、いわゆる「上七下八」（68 歳定年）という党内不文律は、またもや、「政敵」を追い落とすために、柔軟に解釈・適用されることとなった。党大会における政治報告、党規約改正における「習近平の権威の確立」が人事決定にも徹底された、ということである。

トップ7（政治局常務委員）には、退任した李克強、栗戦書、汪洋、韓正の 4 人に代わって、李強、蔡奇、丁薛祥、そして李希が選出されたが、大方の予想に反して、陳敏爾（重慶市書記）、胡春華（國務院副総理）の 2 人は、昇格ならず、陳敏爾は政治局委員に再任されたものの、総理候補にも上がっていた胡春華は、中央委員に「降格」になった。ここでも、「習近平一強」人事が示される結果となった。共青团中央第一書記経験者の胡錦濤（前総書記）の閉幕式での「退場劇」、李克強の「自主辞任」、そして、胡春華

の「降格」の三つの事例は、世にいう、「習近平の共青团嫌い」（コラム参照）を証明するものといえるかもしれない。

7人は、序列に従い、主要兼務職に就くことになるが、焦点の一つが、序列2位となった李強の次期総理就任である。李強は年内に國務院副総理に就任（全人代常務委員会承認）、2023年3月の全人代において李克強の後任として、総理に就任するものと思われる。2022年2月の上海におけるコロナ対策を巡って、その政治手腕に疑問視する声もあったが、習近平がこだわった人事の象徴例である。

序列3位の趙楽際は、2023年3月には、退任した栗戦書に代わって、全人代委員長に、同じく、再任した王滬寧は、汪洋の後任として、全国政協主席に、序列6位の丁薛祥は、韓正に代わって、常務副総理にそれぞれ、就任することが予想されている。

7人のうち、習近平の「後継候補対象者」となる「60後」（1960年代生まれ）は、丁薛祥（1962年生、60歳）一人である。しかし、そのことは、丁薛祥が「次期後継者」であることを意味するものではない。確かに、7人の中では、一番若いのが、それでもすでに、60歳である。習近平が3期どころか、2032年（22回党大会、習近平は79歳、丁薛祥は70歳）まで続投する可能性もあることを考えると、「後継者」の対象は、「70後」（1970年代生）のリーダーという可能性がある。しかし、「70後」のリーダーは20期中央委員205名にはいない。中央候補委員171名のうち、35名が「70後」である。はたして、この中に、「後継者」はいるであろうか。

コラム：共青团出身であることの意味

20期中央委員では、賀軍科（1969年生）が共青团中央（第一書記）出身である。また、中央候補委員のうち、広州市書記の林克慶（1966年生）、成都市書記の施小琳（女、1969年生）、南京市書記の韓立明（女、1964年生）などが共青团出身であるが、いずれも、地方共青团の経歴者である。共青团出身であることが、必ずしも地方リーダーの条件というわけではないが、共青团出身者が多いことは確かである。さらに、共青团出身であることが、地方、とくに、市級レベル以下において、一定の地位を保証されることも確かである（「天然昇進」）。

II-1 表 政治局常務委員・政治局員・中央委員の人数推移

	16 期 (2002 年)	17 期 (2007 年)	18 期 (2012 年)	19 期 (2017 年)	20 期 (2022 年)
総書記	胡錦濤	胡錦濤	習近平	習近平	習近平
政治局常務委員	9	9	7	7	7
政治局委員	24	25	25	25	24
中央委員	198	204	205	204	205
中央候補委員	158	167	171	172	171
中央紀律検査委員	121	126	130	130	133

2 表 20 期政治局常務委員

氏名 (生年)	再任・新任	兼務職	兼務職の予想
習近平 (1953)	再任	総書記・国家主席・軍事 委主席	3 期目 (異例) 2023 年 3 月の全人代にて、国家主席に再選。
李 強 (1959)	新任	(国务院総理)	2023 年 3 月には総理に就任予定、後任上海書記は陳吉寧前北京市 長
趙楽際 (1957)	再任	前中央紀律委員会書記	2023 年 3 月には、全人代委員長に就任すると予想
王滬寧 (1955)	再任	前書記処筆頭書記	2023 年 3 月には、全国政協主席に就任すると予想
蔡 奇 (1955)	新任	書記処書記 (筆頭書記)	北京市書記離任
丁薛祥 (1962)	新任	中央弁公庁主任	近く、中央弁公庁主任辞任、2023 年 3 月、常務副総理に就任する と予想
李 希 (1956)	新任	中央紀律委員会書記	前広東省書記、後任書記は、黄坤明 (前中央宣伝部長)

3表 政治局常務委員の履歴

	2002年	2007年	2012年	2017年	2022年
習近平 (1953)	中央委員 (浙江・上海)	政治局常務委員 (国家副主席)	政治局常務委員 (総書記)	政治局常務委員 (国家主席)	政治局常務委員 (国家主席)
李強 (1959)	黨員 (温州市書記)	黨員 (浙江省委秘書長)	中央候補委員 (浙江省長)	政治局委員 (上海市書記)	政治局常務委員 (次期総理)
趙楽際 (1957)	中央委員 (青海省長)	中央委員 (陝西省書記)	政治局委員 (中央組織部長)	政治局常務委員 (中央紀律委書記)	政治局常務委員 (次期全人代委員長)
王滙寧 (1955)	中央委員 (中央政策室主任)	中央委員 (中央政策室主任)	政治局委員 (中央政策室主任)	政治局常務委員 (書記処書記)	政治局常務委員 (次期政協主席)
蔡奇 (1955)	黨員 (三明市長)	黨員 (杭州市長)	黨員 (浙江省組織部長)	政治局委員 (北京市書記)	政治局常務委員 (書記処書記)
丁薛祥 (1962)	黨員 (上海市科技委副 主任)	黨員 (上海市委常委 員)	中央候補委員 (上海市常務委員)	政治局委員 (中央弁公庁主任)	政治局常務委員 (次期常務副総理)
李希 (1956)	黨員 (蘭州市常務委員)	中央候補委員 (延安市書記)	中央候補委員 (上海市組織部長)	政治局委員 (広東省書記)	政治局常務委員 (中央紀律委書記)

2. 政治局委員

半数以上が新任

20期政治局委員は19期より1名減の24人(7人常務委員を含む)で構成される。24人のうち、習近平ら11人が政治局委員(うち、李強ら4人が常務委員に昇格として再任、残りの13人が新任であった。13人の新任政治局委員の全員が、中央委員からの昇格であり、19期の黄坤明と蔡奇のように、黨員からの大抜擢の例はなかった。

新任となった13人のうち、馬興瑞(新疆)、尹力(福建省)、劉国中(陝西省)、李干傑(山東省)、張国清(遼寧省)、陳吉寧(北京市長)、袁家軍(浙江省)の7人は、有力地方の書記からの就任であり、李強(上海市書記)、蔡奇(北京市書記)両人の政治局常務委員への就任にともない、有望地方書記の大幅な異動が近く、行われるものと思われる。党大会閉幕後、李強の後任として、陳吉寧(北京市長)が上海市書記に、黄坤明が李希の後任として、広東省書記に発令された。

また、国家発展改革委主任であり、習近平ブレーンの一人である何立峰は、予想どおり、政治局委員への昇格を果たした。2023年3月には、経済担当の副総理に就任するものと思われる。さらに、「李強総理」の誕生とともに、丁薛祥（政治局常務委員に昇格）の常務副総理への就任予想とあわせ、2023年3月の次期全人代において、多くの部長（大臣）クラスの異動も予想される。

新任の中で、注目されるのが、王毅（1953年）である。王毅は、2とい13年に外交部長に就任しており、「國務院部長クラス2期10年」という規定により、2023年3月には、外交部長辞任が決定している。加えて、党内規定の「七上八下」により党内地位からも引退予定であった。

しかし、異例にも20期中央委員に再選され、加えて、政治局委員に拔擢された。「習一強人事」による措置である。王毅は19期政治局委員であった楊潔篪（1950年生）の後任として、近く、党中央外事工作委員会弁公室主任に就任することが確実視される。

さらに、予想を覆す事例があった。今期24人の政治局委員には、女性が一人も選出されなかったことである。下馬評では、貴州省書記の譚貽琴（女、1959年）が、孫春蘭（女、19期政治局委員）の後任として有力視されていたが、これも慣例を破って、選出されなかった。ちなみに、205名の中央委員のうち、女性はわずか10名（4.4%）であり、党大会代表の女性比率（27.0%）を大幅に下回っている。19期も女性は9名であり、女性登用への道は中国でも狭き門である。さらに、次期総理候補として、有望視されていた胡春華（1963年生、19期政治局委員、國務院副総理）の再任がなかったことと並んで、これも、「習近平一強人事」の結果である。

4表 20期政治局委員メンバー（筆画順）

		党内地位	前職	兼務ポストの予想
馬興瑞（1959）	新任	政治局委員	新疆自治区書記	新疆自治区書記の地位を維持
王毅（1953）	新任	政治局委員	國務委員・外交部長	異例の昇格、近く、党中央外事工作委弁公室主任に就任
尹力（1962）	新任	政治局委員	福建省書記	北京市書記（11月13日）
石泰峰（1956）	新任	政治局委員	中国社会科学院長	統一戦線部長に就任（10月27日）
劉国中（1962）	新任	政治局委員	陝西省書記	11月27日、陝西省書記は辞任、次期副総理予想
李干傑（1964）	新任	政治局委員	山東省書記	近く、中央組織部長に就任
李書磊（1962）	新任	政治局委員	中央宣伝部副部長	中央宣伝部長（10月27日）
李鴻忠（1956）	再任	政治局委員	天津市書記	近く、全人代副委員長（筆頭）に就任
何衛東（1957）	新任	政治局委員	中央軍事委副主席	前東部戦区司令員(台湾)
何立峰（1955）	新任	政治局委員	国家発展改革委主任	2023年3月副総理に就任予想

張又俠（1950）	再任	政治局委員	中央軍事委副主席	軍事委副主席（異例の再任）
張国清（1964）	新任	政治局委員	遼寧省書記	2022年11月27日、遼寧省書記は辞任、次期副総理就任予想
陳吉寧（1964）	新任	政治局委員	北京市長	上海市書記（10月28日）
陳文清（1960）	新任	政治局委員	国家安全部長	中央政法委書記（10月29日）
陳敏爾（1960）	再任	政治局委員	重慶市書記	昇格なし、天津市書記に異動予想
袁家軍（1962）	新任	政治局委員	浙江省書記	近く、重慶市書記に就任
黃坤明（1956）	再任	政治局委員	中央宣伝部長	広東省書記（10月29日）

注：公式発表をもとに作成。氏名あとのかっこ内は生年。筆画順である（2022年12月5日現在）

政治局委員と地方書記

31 地方書記・省長（市長・主席）の党内地位をみると、20 期中央委員選出時の党内地位をみると、過去最大の 10 地方に及んでいた。党大会後、一部の地方で異動があり、12 月 2 日現在、政治局委員を書記とする地方は、北京、天津、浙江、上海、広東、重慶、新疆の 7 地方となっているが（遼寧、陝西、福建の 3 地方書記が政治局委員から中央委員に“降格”している）、さらに、今後異動の可能性はある。書記の異動に伴って、省長（市長）人事も動いているが、31 地方省長全員が中央委員である。

31 地方の世代構成（6 表）をみると、書記・省長ともに、「60 後」が中核である。「50 後」は、書記で 8 人、うち 3 人が政治局委員（天津市李鴻忠、広東省黃坤明、新疆自治区馬興瑞）、省長は内蒙古の王莉霞（女）一人である。

31 地方リーダーの中で、「70 後」は書記・省長ともに、ゼロであるが、「65 後」（1965 年生、57 歳）は、書記で 3 人、省長では 8 人いる。最年少書記は、1965 年生の 3 人、省長では、2022 年 12 月の北京市長（代理）の殷勇（1969 年生）である。

5 表 政治局委員と地方書記

	人数	該当例
11 期（1977-82 年）	1（23）	上海（蘇振華）
12 期（1982-87 年）	1（25）	天津（倪志福）
13 期（1987-92 年）	3（17）	北京（李錫銘）、天津（李瑞環）、四川（楊汝岱）
14 期（1992-97 年）	3（20）	北京（陳希同）、天津（譚紹文—死亡）、広東（謝非）
15 期（1997-02 年）	4（20）	北京（賈慶林）、上海（黃菊）、山東（吳官正）、広東（李長春）
16 期（2002-07 年）	6（22）	北京（劉淇）、天津（張立昌）、上海（陳良宇）、広東（張德江）、湖北（俞正声）、新疆（王樂泉）
17 期（2007-12 年）	6（25）	北京（劉淇）、天津（張高麗）、上海（俞正声—習近平—韓正）、広東（汪洋）、重慶（薄熙来—張德江）、新疆（王樂泉）
18 期（2012-17 年）	6（25）	北京（郭金龍—蔡奇）、天津（孫春蘭—李鴻忠）、上海（韓正）、重慶（孫政才—陳敏爾）、広東（胡春華）、新疆（張春賢—陳全国）

19期(2017-22年)	6(25)	北京(蔡奇)、天津(李鴻忠)、上海(李強)、重慶(陳敏爾)、広東(李希)、新疆(陳全国)
20期(2022-27年)	10(24)	北京(蔡奇)、天津(李鴻忠)、上海(李強)、重慶(陳敏爾)、広東(李希)、新疆(馬興瑞)、山東(李干傑)、遼寧(張国清)、浙江(袁家軍)、陝西(劉国中)、福建(尹力)
選出時		
党大会後	6(24)	北京(尹力)、天津(陳敏爾)、上海(陳吉寧)、重慶(袁家軍)、広東(黃坤明)、新疆(馬興瑞)、(山東-李干潔、中央組織部長への異動が予想されている)

注：人数は地方書記人数、かつこ内数字は政治局委員数。いずれも、選出時による(赤字地方は党大会後、異動)。

6表 31 地方書記・省長一覧

	書記	市長・省長・主席	人脈(出身機関)
北京市	* 尹力(1962)	◎ 殷勇(代理、1969)	前書記の蔡奇は「政治局常務委員、書記処書記に昇格、尹力は、前福建省書記、殷勇は、副市長からの昇格、最年少省長(市長)
天津市	* 陳敏爾(1960)	◎ 張工(1961)	陳は重慶市書記から、張工は、2022年7月就任
河北省	◎ 倪岳峰(1964)	◎ 王正譜(1963)	倪岳峰は海關署長から、王正譜は副省長より昇格。
山西省	◎ 林武(1962)	◎ 藍仏安(1962)	林武は2021年6月省長より、昇格。藍仏安は海南省委常務委員から
内モン自治区	◎ 孫紹聘(1960)	◎ 王莉霞(女、1958)	孫は退役軍人部長から、王は布小林の後任
遼寧省	◎ 郝鵬(1960)	◎ 李樂成(1965)	前書記の張国中は政治局委員に昇格、副総理就任か、郝鵬は国務院国有資産管理委主任から、李樂成は湖北省から
吉林省	◎ 景俊海(1960)	◎ 韓俊(1963)	景は「陝西閩」、韓は農業農村部副部長から
黒龍江省	◎ 許勤(1962)	◎ 梁惠玲(女、1962)	許勤は河北省長より、梁は、中華全国合作社党組副書記、理事会主任より
上海市	◎ 陳吉寧(1964)	◎ 龔正(1960)	前書記の李強は、政治局常務委員に昇格、陳は前北京市長龔正は「浙江閩」
江蘇省	◎ 吳政隆(1964)	◎ 許昆林(1965)	吳はハーバード留学組、許は蘇州市書記から
浙江省	◎ 易煉紅(1959)	◎ 王浩(1963)	易は江西省書記から、王は西安市書記から。
安徽省	◎ 鄭柵潔(1961)	◎ 王清憲(1963)	鄭は浙江省から、王は青島市書記から。両人ともに「三非党员」から中央委員に昇格
福建省	◎ 周祖翼(1965)	◎ 趙龍(1967)	前書記の尹力は北京市書記に異動、周祖翼は、人力資源社会保障部長よりの就任、趙は自然環境部から
江西省	◎ 尹弘(1963)	◎ 葉建春(1965)	尹は甘肅省書記から、葉は水利部より
山東省	* 李干潔(1963)	◎ 周乃翔(1960)	李は政治局委員に昇格、近く、中央組織部長に就任、周は中国建築公司からの就任
河南省	◎ 樓陽生(1958)	◎ 王凱(1962)	樓は山西省書記から、王は長春市書記から
湖北省	◎ 王蒙徽(1961)	◎ 王忠林(1962)	王蒙徽は住宅建設部長より、王は武漢市書記より
湖南省	◎ 張慶偉(1961)	◎ 毛偉明(1961)	張は前黒龍江書記、毛は工業信息化部副部長歴任
広東省	* 黃坤明(1956)	◎ 王偉中(1960)	前書記の李希は政治局常務委員に昇格、中央紀律委書記、後任書記の黃は、前中央宣伝部長、王偉中は前深圳市書記
広西自治区	◎ 劉寧(1962)	◎ 藍天立(1962)	劉寧は遼寧省長より、藍は広西自治区のみ
海南省	◎ 沈晓明(1963)	◎ 馮飛(1962)	沈は上海浦東書記歴任、前教育部副部長、馮は国務院発展センター出身。
重慶市	* 袁家軍(1962)	◎ 胡衡華(1963)	陳敏爾は「浙江閩」、胡は長沙市書記歴任
四川省	◎ 王曉暉(1959)	◎ 黃強(1963)	王曉暉は中央組織部副部長より、黃は航空工業集団出身。
貴州省	◎ 徐麟(1962)	◎ 李炳軍(1963)	徐麟は、前中央宣伝部副部長、李は国務院秘書歴任
雲南省	◎ 王寧(1961)	◎ 王子波(1963)	王寧は、福建省長より。王は青海省長い。
西藏自治区	◎ 王君正(1963)	◎ 嚴金海(1962)	王君正は新疆より、嚴はラサ市書記より。
陝西省	◎ 趙一徳(1965)	◎ 趙剛(1968、代理)	前書記の劉国中は、11月27日辞任、趙一徳は「浙江閩」、趙剛は「軍工系」出身
甘肅省	◎ 胡昌升(1965)	◎ 任振鶴(1964)	胡は黒龍江省長より、任は江蘇省より。
青海省	◎ 信長星(1963)	◎ 吳曉軍(1966)	信は労働部(現人力資源部)出身。吳は副書記から昇格(江

			西省南昌市書記歴任)
寧夏自治区	◎ 梁言順 (1962)	◎ 張雨浦 (1962)	梁は中央国家機関工作委から、張雨浦は、銀川市書記より
新疆自治区	* 馬興瑞 (1959)	◎ 艾尔肯·吐尼亚孜 (1961)	馬は広東省から、政治局委員に昇格、艾尔肯·吐尼亚孜は新疆のみ

注：31 地方書記・省長（市長・区主席）全員が、党大会代表に選出されている。*は政治局委員、◎は中央委員（2022 年 12 月 9 日現在）。

7 表 31 地方書記・省長・主席の世代別構成

	書記	該当者	省長	該当者
「50 後」	8		1	
1956 年	2	* 李鴻忠、* 黄坤明		
1958 年	2	樓陽生、王東峰		王莉霞（女）
1959 年	4	* 馬興瑞、易煉紅、譚貽琴 （女）、王晓暉		
「60 後」	23		30	
1960 年	4	孫紹聘、郝鵬、* 陳敏爾、 景俊海	3	龔正、周乃翔、王偉中
1961 年	4	王蒙徽、張慶偉、鄭柵潔、 王寧	3	張工、毛偉明 艾尔肯·吐尼亚孜
1962 年	5	* 尹力、林武、許勤、劉寧、 梁言順	7	藍仏安、王凱、王忠林、 藍天立、馮飛、嚴金海、 張雨浦
1963 年	4	尹弘、沈晓明、王君正 信長星	8	王正譜、韓俊、王浩、 王清憲、李炳軍、胡衛 華、黄強、王子波
1964 年	3	倪岳峰、* 陳吉寧、吳政 隆、	1	任振鶴
1965 年	3	* 李干潔、周祖翼、趙一德	4	李樂成、胡昌升、許昆 林、葉建春
1966 年			1	吳曉軍
1967 年			1	趙 龍
1968 年			1	趙 剛（代理）
1969 年			1	殷 勇（代理）
「70 後」	0	-	0	-
計	31	-	31	-

注：*印は政治局委員（2022年12月5日現在）。

3. 中央委員・候補委員

「福建閩」の台頭

20期中央委員は205人、候補委員は171人であり、19期に比べ、中央委員は1名増、候補委員は1名減であった。合計376人の出身地（出生地）別内訳でみると、ここでも、「習人事」の特徴が窺われる、すなわち、習近平が17年に亘って勤務した福建省の関係するリーダーの重用が目立っていることである。

20期中央委員、中央候補委員合わせて376人のうち、福建省出身および勤務歴任者は、32人（10.1%）に及ぶ。決して、多いというわけではないが、小さい数字でもない。このうち、政治局委員以上が7人を占めていることも注目される。さらに、24人の政治局委員プラス書記処の2人を合わせた26人中、9人が福建省出身（戸籍および生地）であることが注目される。

習近平は、1985年から2002年まで、17年間にわたって、福建省に勤務していた。この間、習近平と同じく、福建省に勤務（在任）していたリーダー（部下）は、蔡奇、何立峰、王小洪、鄭新聰、裴金佳、黃坤明、鄭柵潔の7人であり、狭義の「福建閩」ということになり、今回の党大会で、党内地位が大きく引き上げられたリーダーでもある。

8表 「福建閩」関係者一覧

氏名（生年）	党内地位	福建省出身	備考（主な経歴）
蔡 奇（1955）	政治局常務委員・書記処書記	出身地（龍溪）	福建師範大卒、福建省三明市長歴任
尹 力（1962）	政治局委員・北京市書記	勤務地	2020年～22年、福建省書記
李書磊（1962）	政治局委員・中央宣伝部長	勤務地	2014年～15年、福建省委宣伝部長
何衛東（1957）	政治局委員、中央軍事委副主席	出生地	戸籍上は江蘇省であるが、生まれは福建省
何立峰（1955）	政治局委員・発展改革委主任	出生地・勤務地	戸籍上は、広東省出身、廈門大学卒、1973年～2009年勤務地
陳文清（1960）	政治局委員・中央政法委書記	勤務地	2006年～2014年、福建省委副書記
黃坤明（1956）	政治局委員・広東省書記	出身地・勤務地	福建師範大卒、1977年～1999年龍岩市長など歴任

王小洪（1957）	中央委員・公安部長	出身地・勤務地	1974年～2011年、福建省公安局長など歴任、習近平の部下、中央弁公庁主任就任予想（丁薛祥の後任）
鄭新聰（1963）	中央委員・駐マカオ主任	出身地・勤務地	1996年～2018年、三明市、福建省副省長など歴任
侯建国（1959年）	中央委員・中国科学員院長	出身地	福建省平潭市出身
裴金佳（1963）	中央委員・退役軍人事務部長	出身地・勤務地	廈門大卒、1984年～2018年、廈門市書記など歴任
高翔（1963）	中央委員・社会科学院副院長 党	勤務地	2016年、福建省委宣伝部長
唐登傑（1964）	中央委員・民政部長	勤務地	2018年～2020年、福建省長
苗華（1955）	中央委員、中央軍事委委員	出生地（福州）	軍における「習ブレーン」次期国防部長を予想
林向陽（1964）	中央委員、東部戦区司令員	出身地（福清）	台湾海峡を範囲とする東部戦区
林武（1962）	中央委員、山西省書記	出身地（閩侯）	勤務経歴はなし
胡昌升（1963）	中央委員、黒龍江省長	勤務地	2017年～2021年、福建省組織部長、廈門市書記歴任
鄭柵潔（1961）	中央委員、安徽省書記	出身地・勤務地	1997年～2015年、廈門市副秘書長、副省長歴任
周祖翼（1965）	中央委員、福建省書記	勤務地	2022年11月就任、前人的資源社会保障部長（「浙江閩」）
葉建春（1965）	中央委員、江西省長	出身地（周寧）	水利部出身、福建勤務経歴なし
王蒙徽（1960）	中央委員、湖北省書記	勤務地	2011年～2016年、副省長、廈門市書記歴任
王寧（1961）	中央委員、雲南省書記	勤務地	2015年～2021年、福州市書記、福建省長歴任
方永祥（1966）	中央候補委員、西部戦区陸軍政治委員	出身地（廈門）	東部戦区陸軍政治工作部主任歴任
邢善萍（女、1968）	中央候補委員、福建省委常委委員、組織部長	勤務地	2014年から福建省勤務、前山東省委常務委員
劉洪建（1973）	中央候補委員、昆明市書記	勤務地	1993年～2020年、南平市長など歴任
陳建文（1966）	中央候補委員、広東省宣伝部	出身地（龍海）	福建師範大卒

	長		
胡文容 (1964)	中央候補委員、上海市組織部長	出身地 (莆田)	同済大学卒、國務院政府特待生
郭芳 (女、1970)	中央候補委員。上海市蛇口区書記	出身地 (徳化)	上海市のみ勤務
郭寧寧 (女、1970)	中央候補委員、福建省副省長	勤務地	2018年～副省長、中国農業銀行出身 (「金融副省長」)
崔永輝 (1970)	中央候補委員、廈門市書記	勤務地	2020年～。副省長歴任
陳潔 (1965)	中央候補委員、同済大学校長	出身地 (福清)	知能ロボット研究者
龔旗煌 (1964)	中央候補委員、北京大学校長	出身地 (莆田)	光学研究者、日本理化学研究所留学

9表 習近平と「福建閩」の代表的リーダー

	習近平 (1953年)	蔡奇 (1955年)	何立峰 (1955)	黄坤明 (1956年)	王小洪 (1957年)
現職	国家主席・総書記・軍事委 主席	政治局委員 書記処書記	政治局委員 国家発展改革委主 任(次副総理)	政治局委員 広東省書記	中央委員 公安部長
1969年	北京101中学、陝西省下放				
1975年	清華大学入学	1975年 福建省下放 (福建省出身)	福建省永定県農場 (下放)	1974年 陸軍兵士	福建省閩侯県(下 放)
1979年	中央軍事委弁公庁			1977年 福建省上杭 人民公社	
1982年	河北省正定県書記			1982年 福建省龍 岩区幹部	
1985年	廈門市副市長	1985年 福建省弁公 庁	廈門市政府弁公室 副主任		福建省閩侯県公安 局長
1990年	福州市書記				
1997年	中央候補委員・福州市書記	1997年 福建省三 明市長	泉州市書記	1995年 福建省龍 岩区永定県書記	福建省福州市公安 局長
1999年	福建省長代理		福州市書記	福建省龍岩市長	
2001年	福建省長				

2002年	浙江省長代理・中央委員・ 浙江省書記（2002年10月 ～2007年3月）	2004年 浙江省台州 市書記		2003年 浙江省嘉 興市書記	福建省公安庁副庁 長
2007年	上海市書記（2007年3月～ 10月） 政治局常務委員	2007年浙江省杭州 市長	廈門市書記		
2008年	国家副主席				
2009年	日本公式訪問（天皇陛下と 会見）		天津市副書記		
2010年	中央軍事委副主席			浙江省杭州市書記	
2011年		2010年 浙江省組織 部長			廈門市公安局長
2012年	総書記・中央軍事委員会主 席			18期中央候補委員	
2013年	国家主席・国家中央軍事委 員会主席	2013年 浙江省常務 副省長		中央宣伝部副部長	
2014年		2014年 中央国家安 全委弁公室副主任	国家發展改革委副 主任		河南省副省長、公安 庁長
2016年		2016年 北京市長代 理			北京市副市長、公安 局長
2017年	19期中央政治局常務委 員・総書記・軍事委主席	19期中央委員・政治 局委員・北京市書記	19期中央委員 国家發展改革委主 任	19期中央委員・政治 局委員・中央宣伝部 長	19期中央委員 公安部副部長
2018年	国家主席（再選）		国家發展改革委主 任、全国政協副主席		
2022年	総書記・国家主席	政治局常務委員 書記処書記	政治局委員 国家發展改革委主 任	政治局委員（留任） 広東省書記	中央委員 書記処書記、公安部 長

「航天系」「軍工系」—東北勢力

福建に次いで、「航天系」（宇宙・航空機）、「軍工系」（兵器工業）ないし、東北勢力の台頭が目される。東北地方は、ハルビン、長春、瀋陽など有数の工業基地であり、ハルビン工業大学卒のリーダーを多く輩出している。

10表 「航天系」・「軍工系」—東北勢力

氏名（生年）	党内地位	出身地	東北との関係
丁薛祥（1962）	政治局常務委員、中央弁公庁主任	江蘇省南通	東北重型機械学院（現燕山大学）卒
馬興瑞（1959）	政治局委員、新疆自治区書記	山東省郟城	ハルビン工業大学卒、中国航天科技集団総経 理歴任
劉国中（1962）	政治局委員、前陝西省書記	黒龍江省望奎	ハルビン工業大学卒
李鴻忠（1956）	政治局委員、前天津市書記	山東省昌樂	吉林大学歴史学専攻卒 2023年3月全人代副 委員長就任予想
張国清（1964）	政治局委員、前遼寧省書記	河南省羅山	長春光学精密機械学院卒、(現長春理工大学) 次期国務院副総理就任予想
陳吉寧（1964）	政治局委員、上海市書記	吉林省梨樹	吉林出身、20党大会時は、北京市長
袁家軍（1962）	政治局委員、重慶市書記	吉林省通化	北京航空航天大学卒、航天工業公司歴任 2023年3月副総理就任予想
郝 鵬（1960）	中央委員、遼寧省書記	陝西省鳳翔	西北工業大学卒、前国有資産管理委主任、 2022年11月27日就任
張慶偉（1961）	中央委員、湖南省書記	河北省（吉林 省生まれ）	西北工業大卒、中国航天科技集団総経理、中 国商用航空機董事長歴任
黄 強（1962）	中央委員、四川省長	浙江省東陽	西北工業大卒、中国航空工業集団公司設計師 歴任
趙 剛（1968）	中央委員、陝西省長（代理）	遼寧省新民	北京理工大卒、中国兵器工業公司歴任

」

11 表 20 期書記処書記

氏名（生年）	党内地位	兼務職	備考（主な経歴）
蔡 奇（1955）	政治局常務委員	書記処書記	筆頭書記
石泰峰（1956）	政治局委員	統一戦線部長	党大会後、現職就任
李干傑（1964）	政治局委員	山東省書記	山東省書記は、近く、辞任（中央組織部長就任予想）
李書磊（1962）	政治局委員	中央宣伝部長	前中央紀律委副書記（党大会後、現職就任）
陳文清（1960）	政治局委員	中央政法委書記	前国家安全部長（党大会後現職就任）
劉金国（1955）	中央委員	中央紀律委副書記	「双委」（中央委員・中央紀律委）
王小洪（1957）	中央委員	公安部長	福建時代の習近平の部下、中央弁公庁主任就任予想（丁薛祥の後任）

4. 中央紀律検査委員会

党員の規律をチェックする機構が中央紀律検査委員会である。歴史的には、1927年（党5回大会）に中央監察委員会として発足、その後、6回大会では中央審査委員会（劉少奇主席）、1949年の建国時に、中央紀律検査委員会（朱徳書記）と改称された。1960年代の文革で組織解散したが、改革・開放路線を決定した1978年12月の三中全会で復活再開された。「改革・開放」路線とともに、30年の歴史を築いている。歴代書記は、政治局常務委員の主要な兼務ポストであり、2017年の党大会で、趙楽際（1959年生）が王岐山の後任に就任した。そして、20期では、李希（広東省書記）が政治局常務委員への昇格とともに、趙楽際の後任として、中央紀律委書記に就任し、習近平の「汚職・腐敗摘発」の担い手となった。

共産党員が、汚職・腐敗容疑で失脚・逮捕される場合、まず、党内でのチェックが入る。多くが、「重大な紀律違反」という容疑で紀律委員会に連行され、「調査」を受ける。さらに、「調査」（容疑の認、罪状が明白になった場合、「双規」（Shuang Gui）、つまり「一定の時間・一定の場所」にて、本格的な取り調べが行われる。そして、党内でのチェックが終わり、罪状が確定して、司法に送られる。以後は、裁判、判決、結審、収監というステップをふむ。

罪状が明らかな場合には、いきなり、司法による逮捕（その前の刑事拘束-日本でいう任意の事情聴取）、同時に党委員会による党籍剥奪、公職追放などの処分が行われ、裁判に移行するケースもある。

20 期中央紀律委員会（“三委”の一つ）は李希を筆頭に、19 期と同じく、8 人の副書記、19 人の常務書記（副書記を含む）、そして 133 人の委員から構成されている。8 人の副書記は 4 人が再任、4 人が新任となった。

12 表 20 期中央紀律検査委員会書記・副書記

氏名（生年）	地位	再任・新任	党内地位	備考
李 希（1959 年）	書記	新任	政治局常務委員	広東省書記
劉金国（1955 年）	副書記	再任	中央委員	河北省公安関係が長い、「双委」
張昇民（1958 年）	副書記	再任	中央委員	2017 年 11 月、党大会後、上將に任命。
蕭 培（1958 年）	副書記	新任	中央紀律委員会委員	国家監察委副主任
喻紅秋（女、1960 年）	副書記	再任	中央紀律委員会委員	唯一の女性副書記
傅 奎（1962 年）	副書記	再任	中央紀律委員会委員	湖南省紀律委書記歴任
孫新陽（1962 年）	副書記	新任	中央紀律委員会委員	海南省、江西省などの紀律委歴任
劉学新（1963 年）	副書記	新任	中央紀律委員会委員	海関総署紀律、上海市常務委員など歴任。
張福海（1964 年）	副書記	新任	中央紀律委員会委員	広東省常務委員歴任。

5. 中央軍事委員会

2022 年 10 月の 20 回党大会前の情報では、軍事委員会副主席の増員、軍事委員の増員も噂されていたが、最終的には、副主席は異例にも、習近平に近い張又俠（1950 年生、前装備発展部長）が再任され、2 人体制は不変であった。軍事委員会委員も 18 期の 10 人体制から 7 人体制に減員した。このことは、軍における習近平の権力基盤の強化なのか、後退なのか意見の分かれるところである。党大会における焦点人事の一つである、軍事委員会への「習家軍」の副主席への抜擢が習近平の当初の目論見であったとすれば、軍人事における習近平の「夢」は実現できなかったことになる。

しかし、軍事委員会委員は、これまでの「11 人体制」においても、司令官のみが選出されていたが、19 期から、「7 人体制」となり、初めて、第二砲兵（現ロケット部隊）出身の張昇民（1958 年生）が加わり、これまで軍事委員会委員の所管になかった紀律委書記に就任した。さらに、張昇民は、20 期で再選された。

20 期中央軍事委員会の構成は 19 期と同じく、7 人であるが、このうち 4 人が新任、4 人が再任である。

党大会前の予想では、中央軍事委員会副主席には、苗華が就任するものとみていたが、予想に反して、張又峽（1950年生）が留任したことであり、さらに、軍における「習近平ブレーン」のひとりである苗華（1955年生）が副主席に昇格できなかったことである。しかし、苗華は、退任する魏鳳和（1954年生、20期中央委員に選出されず）の後任として、2023年3月の全人代で、国防部長に就任する可能性がある。

13表 20期中央軍事委員会

	氏名（生年）	軍銜	所属	党内地位
主席	習近平（1953）	文人	再任、党総書記、国家主席	政治局常務委員
副主席	張又峽（1950）	上将	副主席再任	政治局委員
	何衛東（1957）	上将	新任、前東部戦区司令員	政治局委員
委員	李尚福（1958）	上将	新任、前ロケット軍司令官	中央委員
	劉振立（1964）	上将	新任、聯合参謀部参謀長（前陸軍司令官）	中央委員
	苗華（1955）	上将	再任、前海軍司令員（次期国防部長就任予想）	中央委員
	張昇民（1958）	上将	新任、軍紀律委員会書記（第二砲兵出身）	中央委員

党大会と軍人事

20回と党大会において、軍からは、43人の中央委員および、18人の中央候補委員が選出された。19期に比べ、中央委員は2名増、候補委員は同数であった。軍種別・所属別内訳は14表のとおりであり、バランスをとった選出となっている。

14表 軍の所属別20期中央委員・候補委員

	中央委員	候補委員	合計	19期
中央軍事委員会	8	2	10	15
陸軍	4	2	6	4
海軍	3	1	4	5
空軍	3	3	6	5
ロケット部隊	2	2	4	6
戦略支援部隊	2	-	2	4

5 大戦区	8	1	9	14
地方軍区	2	1	3	-
武装警察部隊	2	3	5	4
軍事アカデミー	4	2	6	7
合計	37	20	57	66

注：所屬分類は 2022 年 11 月 20 日現在の分類による。

15 表 五大戦区と幹部一覧

	司令員（前職）	政治委員	主な幹部	備考（戦区範囲）
東部戦区	◎林向陽（上将、64） （東部戦区陸軍司令員）	何 平（上将、57、 2017 年 9 月）	○魏文微（少将、海軍副司令員）	旧南京軍区 福建、江蘇、安徽、浙江、上海、江西
南部戦区	◎王秀斌（上将、64、東部戦区聯合参謀部参謀長） （2019 年 7 月上将）	◎王建武（上将、58） （2019 年 12 月）	◎楊志亮（62、南部戦区海軍政治委員） ◎徐西盛（64、副政治委員）	旧広州軍区 広西、広東、湖北、湖南、海南
西部戦区	◎汪海江（上将、63、新疆軍区司令員） （2021 年 9 月上将）	◎李鳳彪（上将、59、中部戦区副司令員兼参謀長）	○方永祥（66、陸軍政治委員、中將） ○吳俊宝（少将、空軍副司令員）	旧成都軍区、旧蘭州軍区 新疆、青海、チベット、四川、重慶、甘肅、寧夏、雲南、貴州
北部戦区	◎王強（上将、西部戦区空軍司令員）	◎劉青松（上将、63、海軍東海艦隊政治委員）	◎胡中明（中將、副司令員兼海軍司令員） ○石正露（63、中將、陸軍司令員） ○姜国平（66、中將、副司令員兼参謀長）	旧瀋陽軍区、旧北京軍区、旧済南軍区、 内蒙古、黒龍江、吉林、遼寧、山東
中部戦区	◎吳亞男（上将、62、北部戦区副司令員兼陸軍司令員）	◎徐德清（上将、63、西部戦区陸軍政治委員） （2022 年 1 月）	范承才（中將、64、76 軍長） （2019 年中將）	旧北京軍区、旧済南軍区、旧蘭州軍区 北京、天津、河北、山西、陝西、河南

注：*は政治局委員、◎中央委員、○中央候補委員、△中央紀律委員を示す（2022 年 12 月 1 日現在）。

16 表 軍種別司令員・政治委員と軍銜・党内地位

軍種	司令員			政治委員			備考
	司令員	軍銜	職務	政治委員	軍銜	職務	
陸軍	◎劉振立（64）	上将	陸軍参謀長	◎秦樹桐（63）	上将	陸軍政治工作部主任	劉振立は 2021 年 7 月に上将、2022 年中央軍事委員 秦樹桐は 2022 年 1 月上将
海軍	◎董 軍（64）	上将	南部戦区副司令員	◎袁華智（61）	上将	海軍副政治委員	董軍は、2021 年 9 月上将、袁華智は 2022 年 1 月上将。
空軍	◎常丁求（67）	上将	空軍副司令員	◎于忠福（63）	上将	南京軍区副政治委員	常丁求は 2021 年 9 月に上将に昇格。
ロケット軍	◎李玉超	上将	55 基地司令員	◎徐忠波（60）	上将	54 集団軍政治委員	李玉超は、2022 年 1 月上将、徐忠波は 2020 年上将に昇格。
戦略部隊	◎巨乾生（62）	上将	戦略支援部隊網	◎李 偉（60）	上将	新疆軍区政治委員	巨乾生は 2019 年 7 月

			絡系統部司令員				に上将昇格、李偉は2020年上将。
武警	◎王春寧（62）	上将	北京衛戍区司令員	◎張紅兵（不詳）	上将	東部戦区政治委員	張紅兵は2022年1月上将

注：◎は中央委員、○中央候補委員、無印は党員。

世代構成

これまでに比べ、軍の世代交代も急速に進んでいる。国務院・地方幹部（文人）は「64歳定年」（女性は60歳）が厳格に実行されてきたが、軍人は平均で3歳程度、退役年齢が遅れていた。しかし、昨今では、概ね「65歳」（現時点では、1956ないし1957年生）の退役が徹底されつつある。

軍所属の中央委員および候補委員58人の世代構成は17表のとおりである。まず、58人のうち、「50後」は、わずか5人であり、全員が中央委員である。「60後」も19期の26人から、20期は中央委員31人、候補委員15人の合計46人であり、全体の79%に及んでおり、軍においても、「60後」が中核世代となっている。ただし、「70後」は軍においては、まだいない。

17表 20期軍出身中央委員の世代構成

	中央委員	中央候補委員	合計	19期
1950年代生（「50後」）	5	0	5	38
1960年代生（「60後」）	31	15	46	26
1970年代生（「70後」）	0	0	0	0
不明	2	5	7	2
合計	38	20	58	66

18表 軍銜別中央委員の構成

	中央委員	中央候補委員	合計	19期
上将	22	0	22	12
中將	10	4	14	32
少將	1	13	14	15
文人・不明	3	2	5	7
合計	38	19	55	66

注：19期は中央委員および中央候補委員の合計である。

Ⅲ 党大会後の人事

1. 政治局常務委員の兼職予想

2022年10月の党大会終了後の人事について、党中央、一部の地方で異動があった。7人の政治局常務委員のうち、兼務職が決まっていないのは、ナンバー2の李強、ナンバー3の趙楽際、ナンバー4の王滬寧、ナンバー6に丁薛祥の4人である。序列に照らして予想すると、李強は次期総理、趙楽際は全人代委員長、王滬寧が政協主席、そして、丁薛祥が、韓正の後任常務副総に就任するものと思われる。次期総理となる李強については、一部で、年内に副総理に就任するとみる向きもあったが、年内に全人代常務委員会開催の予定はなく、李強は、副総理を経ずに、いきなり総理に就任する可能性が高い。なお、これらの人事は、いずれも、2023年3月開催予定の全人代・政協（「两会」）にて、決定される予定である。

Ⅲ-1 表 政治局常務委員の序列と兼務職の変遷

	16期	17期	18期	19期	20期
総書記	胡錦濤 (①)	胡錦濤 (①)	習近平 (①)	習近平 (①)	習近平 (①)
総理	温家宝 (③)	温家宝 (③)	李克強 (②)	李克強 (②)	*李 強 (②)
全人代	呉邦国 (②)	呉邦国 (②)	張徳江 (③)	栗戦書 (③)	*王滬寧 (③)
政協	賈慶林 (④)	賈慶林 (④)	俞正声 (④)	汪 洋 (④)	*趙楽際 (④)
書記処	曾慶紅 (⑤)	習近平 (⑥)	劉雲山 (⑤)	王滬寧 (⑤)	蔡 奇 (⑤)
紀律委	呉官正 (⑦)	賀国強 (⑧)	王岐山 (⑥)	趙楽際 (⑥)	李 希 (⑦)
常務副総理	黄 菊 (⑥)	李克強 (⑦)	張高麗 (⑦)	韓 正 (⑦)	*丁薛祥 (⑥)
無任所 (イデオロギー・宣伝)	李長春 (⑧)	李長春 (⑤)	数字は序列を意味する。7人体制のもとでは、イデオロギー担当は書記処書記が、		19期と同じく、7人体制。

政法委書記	羅 幹 (⑨)	周永康 (⑨)	政法委書記は政治局委員が担当する。	
-------	---------	---------	-------------------	--

注：16期、17期は9人体制。19期は序列順。20期の兼務職は一部（*印）予想。

2. 地方書記—政治局委員人事

党大会終了後、一部の地方書記（政治局委員）人事がおこなわれた。まず、政治局常務委員に昇格した、北京、上海、広東の3地方の後任書記はいずれも、政治局委員が就任している。北京市書記には、前福建省書記の尹力（1962年生）が、上海市書記には、前北京市長の陳吉寧（1964年生）が、そして、広東省書記には、前中央宣伝部長の黃坤明（1956年生）が就任した。

20期では、過去最多の10地方書記が政治局委員に選出された。このうち、北京市書記に異動した尹力の後任福建省書記には、前人的資源社会保障部長の周祖翼（1965年生、中央委員）が指名された。また、遼寧省書記には、国務院国有資産監督管理委員会主任の郝鵬（1960年生、中央委員）が就任、さらに、陝西省書記には、趙一徳（1965年生、中央委員）が省長から昇格した。

前遼寧省書記の張国清（1964年生）と前陝西省書記の劉国中（1962年生）はいずれも、政治局委員であるが、2023年3月の全人代（国務院人事）において、副総理に選出されることが予想されている。

なお、上海市書記に異動した陳吉寧の後任の北京市長には、殷勇副市長（1969年生、中央委員）が代理として昇格し、同じく、陝西省長には、延安市書記の趙剛（1968年生、中央委員）が代理省長に就任した。なお、殷勇は、31地方の省長（市長・主席）の中で最年少となる。

2表 党大会後の人事異動

	新	旧	党内地位	備考
陳吉寧（1964）	上海市書記	北京市長	政治局委員	李強の政治局常務委員への昇格・離任に伴う後任人事（10月28日発令）
殷 勇（1969）	北京市長（代理）	北京市副市長	中央委員	前市長陳吉寧の上海転出に伴う後任市長（代理）
尹 力（1962）	北京市書記	福建省書記	政治局委員	政治局常務委員に昇格した蔡奇の後任書記、国家衛生委副主任歴任 11月13日発令
黃坤明（1956）	広東省書記	中央宣伝部長	政治局委員	李希の政治局常務委員転出に伴う後任書記、習近平側近の一人 10月29日発令
周祖翼（1965）	福建省書記	人的資源社会保障部長	中央委員	政治局委員に転出した尹力の後任書記、同済大学書記歴任。

				11月13日発令
陳文清（1960）	中央政法委書記	国家安全部長	政治局委員	10月29日就任発表
劉国中（1962）	（次期副総理）	陝西省書記	政治局委員	11月27日辞任発表、後任書記は、趙一徳省長（1965年生）は最年少書記
張国清（1964）	（次期副総理）	遼寧省書記	政治局委員	11月27日公表
郝 鵬（1960）	遼寧省書記	国務院国有資産管理委主任	中央委員	11月27日公表、前書記の張国清の兼務職は不明（副総理就任説あり）
袁家軍（1962）	重慶市書記	浙江省書記	政治局委員	12月8日公表
陳敏爾（1960）	天津市書記	重慶市書記	政治局委員	12月8日公表

3. 国務院人事

党大会を経て、次の大きな人事の焦点は、2023年3月開催予定の全人代における国家人事、国務院、全人代、全国政協および司法部門などの人事である。国家人事においては、国家主席は習近平の再任は確定しているが、焦点は、国家副主席の王岐山（1948年生）の去就である。習近平の信頼厚く、外交補佐として活躍していたが、大方のみるところ、退任の可能性が高い。

国務院部長クラス人事では、すでに、いくつかの部長クラスの異動可能性がある。中央政法委書記に就任している国家安全部長の陳文清（1960年生、政治局委員）の後任、福建省書記に異動した周祖翼の後任、人的資源社会保障部長、遼寧省書記に異動した郝鵬の国有資産管理委主任人事（香港情報では、山西省書記の林武が就任するといわれている）、さらに、最大の焦点となる王毅外交部長（1953年生、政治局委員、中央外事工作委弁公室主任の就任予想）の後任人事である。

次期外交部長候補には、中央連絡部長の劉建超（1964年生、中央委員）、駐米大使の秦剛（1966年生、中央委員）らが挙がっている。秦剛は、駐米大使として、就任したばかりであるが、在任中、中央委員に選出されたのは、異例でもあり、次期部長の可能性が高い（秦剛は、12月6日の米中貿易委員会晩餐会で事実上の“辞任”挨拶をおこなった）。

国務院人事の中で、次の人民銀行長も焦点の一つである。現行長の易綱（1956年生、19期中央候補委員）および副行長・書記の郭樹清（1956年生、19期中央委員、銀行業管理委員会主席）ともに、20期中央委員には選出されていない。人民銀行長は部長クラスであり、党内地位も中央委員クラスである。

金融界代表では、20期中央委員に易会満（1964年生、中央委員、証券監督委員会主席）、中央候補委員には、人民銀行副行長も歴任した朱鶴新（1968年生、中信集団董事長）がいる。この二人が、次期人民銀行長の有力候補となろう。

3表 国務院人事（予想）

		党内地位	前職	
総 理	李 強（1959年）	政治局常務委員	上海市書記	国務院経歴なし 華東3地区書記・省長歴

				任
常務副総理	丁薛祥（1962年）	政治局常務委員	中央弁公庁主任（現職）	国務院経歴なし
副総理	何立峰（1955年）	政治局委員	国家発展改革委主任	劉鶴の後任（金融担当）、習近平のブレーン
同	張国清（1964年）	政治局委員	前遼寧省書記	張国清は、兵器工業集団総経理、ハーバード留学組、重慶市長歴任
同	劉国中（1962年）	政治局委員	前陝西省書記	ハルビン工業大卒、黒龍江省、吉林省長歴任
同	肖捷（1957）	中央委員	国務委員・秘書長	財政部長歴任
国務委員 （国防部長）	苗華（1955年）	中央委員	中央軍事委員会委員	海軍出身、軍における習近平ブレーン 国防部長に就任予想
同	丁学東（1960年）	中央委員	国務院副秘書長	財政部出身、国務院秘書長就任予想
同 （公安部長）	王小洪（1957年）	中央委員	書記処書記 公安部長	中央弁公庁主任就任の可能性もある 習近平の福建時代からの部下
同	王勇（1955年）	中央委員	国務委員	異例の留任（中央委員）、国有企業担当
同 （外交部長）	秦剛（1966年）	中央委員	駐米大使	異例の就任、外交部長就任予想

注：現在の副総理は、4人、国務委員は5人。

4表 国務院構成メンバーと20回党大会中央委員

	氏名（生年）	20期党内地位	20期・次期人事予想
総理	李克強（1955）	黨員	2023年3月総理辞任
	李強（1959）	政治局常務委員	2023年3月就任予想、2022年12月副総理就任か？
副総理	韓正（1954）	黨員	引退
	丁薛祥（1960）	政治局常務委員	2023年3月就任予想、「トップ7」唯一の「60後」
〃	孫春蘭（女、1950）	黨員	引退
	劉国中（1962）	政治局委員	前陝西省書記、2023年3月副総理就任予想
〃	胡春華（1963）	中央委員	政治局委員再選されず、副総理も解任か
	張国清（1964）	政治局委員	現遼寧省書記、2023年3月就任予想
〃	劉鶴（1952）	黨員	引退
	何立峰（1955）	政治局委員	2023年3月就任予想、「習近平側近のひとり」
国務委員	魏鳳和（1954）	黨員	引退
〃	王勇（1955）	中央委員	留任
〃	王毅（1953）	政治局委員	異例の昇格、中央外事工作委員会弁公室主任就任の 予定
〃	肖捷（1957）	中央委員	留任（副総理昇格の可能性）

〃	趙克志 (1953)	黨員	引退
國務院弁公庁	肖捷 (1957)	中央委員	留任
外交部	王毅 (1953)	政治局委員	部長職は引退(年齢制限、2期)
	秦剛 (1966)	中央委員・駐米大使	駐米大使在任中の中央委員就任は異例
国防部	魏鳳和 (1954)	黨員	引退
	苗華 (1955)	中央委員	中央軍事委員会委員、軍における「習新軍」 2023年3月就任予想
国家発展・改 革委員会	何立峰 (1955)	政治局委員	2023年3月、副総理就任予想
	鄭柵潔 (1961)	中央委員	2023年3月後任主任に就任予想、現安徽省書記 習近平の福建時代の部下
教育部	懷進鵬 (1962)	中央委員	留任 (2021年8月就任)
科学技術部	王志剛 (1957)	黨員	辞任か? (中央委員に再選されず)
工業・情報 部	金壯龍 (1964)	中央委員	留任 (2022年9月就任)
国家民族事務 委員会	潘岳 (1960)	中央委員	留任 (2022年3月就任)、中央委員に昇格
公安部	王小洪 (1958)	中央委員 (書記処書記)	留任 (2022年4月就任)、國務委員に就任か?
国家安全部	陳一新 (1959)	中央委員	前部長の陳文清は、辞任 (2022年10月)、中央政 法委書記就任
民政部	唐登傑 (1964)	中央委員	留任 (2022年4月就任)、中央委員に昇格。
司法部	唐一軍 (1961)	黨員	辞任か? 中央委員に選出されず
財政部	劉昆 (1950)	黨員	引退 (年齢制限)
人力資源・社 会保障部	(空席)		前部長の周祖翼は、中央委員に昇格、福建省書記に 転出 (2022年11月)
自然資源部	王広華 (1963)	中央委員	留任 (2022年6月就任)、中央委員に選出
生態環境部	黄潤秋 (1963)	(非黨員)	留任、書記の孫金龍 (1962) は留任。
住宅・都市農 村建設部	倪虹 (1962)	中央委員	留任(2022年6月就任)、中央委員に昇格
交通運輸部	李小鵬 (1958)	黨員	辞任 (中央委員に選出されず)
水利部	李国英 (1965)	中央委員	留任 (2021年2月就任)

農業農村部	唐仁健（1962）	中央委員	留任（2020年12月就任）
商務部	王文濤（1959）	中央委員	留任（2020年12月就任）、中央委員に昇格。
文化・旅遊部	胡和平（1960）	中央委員	留任（2020年8月就任）
国家衛生健康 委員会	馬曉偉（1959）	中央委員	留任（2018年3月就任）
退役軍人事務 部	裴金佳（1963）	中央委員	留任（2022年4月就任）、中央委員に昇格
応急管理部	王祥喜（1962）	中央委員	留任（2022年9月就任）、中央委員に昇格
中国人民銀行	易 綱（1956）	党員	引退（2018年3月就任）、書記の郭樹清（1956年）も引退
	易会満（1964）	中央委員	現中国証券管理監督委員会主席、2023年3月就任予想（中国工商銀行董事長歴任）
	朱鶴新（1962）	中央候補委員	招商集団董事長、前人民銀行副行長（次期行長候補）
審計署（会計 検査院）	侯 凱（1962）	中央委員	留任（2020年6月就任）、中央委員に昇格
国有資産管理 委員会	郝 鵬（1960）	中央委員	2022年11月27日、遼寧省書記に就任
	林 武（1962）	中央委員	近く、郝鵬の後任主任に就任予想、現山西省書記

注：「引退」および「留任」の評価は、筆者による。2022年12月1日現在。

経済・金融関係人物

5表 経済・金融関係中央委員・候補委員一覧

氏名（生年）	党内地位・現職	経済関係歴任	業歴・今後の地位予想
馬興瑞（1959）	政治局委員・新疆自治区書記	中国航天科技集団総 經理	工業信息化部副部長歴任 ハルビン工業大学卒
何立峰（1955）	政治局委員・發展改革委主任	国家發展改革委主任	2023年3月副總理就任予想（経済・金融担当）
張国清（1964）	政治局委員・遼寧省書記	中国兵器工業集団総 經理	2023年3月副總理就任予想 ハーバード大学商学院留学
韓文秀（1963）	中央委員・中央財經委員会弁 公室副主任（常務）	国家計画委員会	米中交渉メンバー 中国人民大学金融学博士、英国留学

丁学東 (1960)	中央委員・国務院副秘書長	財政部出身	2023年3月国務院秘書長就任予想 財政部長就任の可能性もあり
肖捷 (1957)	中央委員・国務委員・国務院 秘書長	財政部出身	2023年3月副総理就任予想 財政部長歴任
羅文 (1964)	中央委員・国家市場監督管理 総局長	国家発展改革委副主 任	電子工業部出身、工業信息化部副部長 歴任
鄒加怡 (女、1963)	中央委員・全国政協副秘書長	財政部出身	駐世界銀行中国執行董事歴任、英国留 学
雷凡培 (1963)	中央委員・中国船舶集团公司 董事長	航天工業部出身	中国航天科技集団董事長歴任、唯一の 企業代表中央委員
易会満 (1964)	中央委員・中国証券管理委員 会主席	工商銀行出身	2023年3月中国人民銀行行長就任予 想
殷勇 (1969)	中央委員・北京市長 (代理)	中国人民銀行出身	将来の人民銀行行長候補、ハーバード 留學歷
韓俊 (1963)	中央委員・吉林省長	国務院発展研究セン ター出身	中央財経委弁公室副主任、農業農村部 副部長歴任 (農業専門家)
程麗華 (女、1965)	中央委員・安徽省副書記	財政部副部長	青海省財政庁長、副省長歴任、将来、 中央要職就任予想
藍仏安 (1962)	中央委員・山西省長	財政部出身	広東省財政庁、広東省副省長歴任
叢亮 (1971)	中央候補委員・国家糧食管理 局長	国家計画委員会出身	国家発展改革委秘書長歴任、米中交渉 メンバー、将来の国務院部長クラス候 補 (「70後」)
康義 (1966)	中央候補委員・国家統計局長	中国農業銀行副行長 歴任	中国建設銀行出身、将来の経済関係部 長クラス候補
丁向群 (女、1965)	中央候補委員・安徽省組織部 長	中国農業銀行、中国銀 行、中国開発銀行歴任	金融経験豊富、いずれ、中央金融部署 に戻る
劉強 (1971)	中央候補委員・済南市書記	中国農業銀行出身	中国銀行副行長歴任
劉桂平 (1966)	中央候補委員・天津市常務副 市長	中国農業銀行出身	中国建設銀行、人民銀行副行長、重慶 市副市長歴任
李雲澤 (1970)	中央候補委員・四川省副省長	中国建設銀行出身	工商銀行副行長歴任
吳清 (1965)	中央候補委員・上海市副市長	中国証券管理委	上海証券取引所理事長歴任
郭寧寧 (女、1970)	中央候補委員・福建省副省長	中国銀行シンガポー	中国農業銀行副行長、ルクセンブルク

		ル支店長	支店長を歴任、将来、中央金融機関に戻る
黄志强 (1970)	中央候補委員・内蒙古自治区副主席	中国銀行出身	中国銀行遼寧省支店長、中信集団副総経理など歴任
蔡允革 (1971)	中央候補委員・重慶市組織部長	中国人民銀行出身	光大集団副総経理、交通銀行副書記など歴任
朱鶴新 (1968)	中央候補委員・中信集団董事長	交通銀行出身	次期人民銀行長候補者のひとり、中国銀行副行長、中国人民銀行副行長歴任
劉 珺 (1972)	中央候補委員・交通銀行長	光大銀行出身	光大銀行副行長歴任、米オクラホマ州立大留学
谷 澍 (1967)	中央候補委員・中国農業銀行董事長	工商銀行出身	工商銀行長歴任、米国ペンシルバニア大学留学
張金良 (1969)	中央候補委員・中国建設銀行副董事長	中国銀行出身	中国銀行副行長、光大銀行長、中国邮政集団総経理歴任
蔡希良 (1966)	中央候補委員・中国人民保険総裁	中信集団	中信公司副総経理、中国輸出信用保険総経理歴任
廖 林 (1966)	中央候補委員・中国工商銀行長	中国建設銀行出身	中国建設銀行副行長、工商銀行副行長歴任
繆建民 (1965)	中央候補委員、招商局董事長 招商銀行董事長	中国太平洋保険総裁	中国人民保険董事長、中国人寿保険董事長歴任

6 表 中国銀行保険監督管理委員会主席・副主席・紀検組長一覧

	氏名	前職	主要経歴	備考
主席	郭樹清 (1956)	中国銀行業監督管理委員会主席、党書記	中国人民銀行副行長、中国建設銀行董事長、山東省長	19 期中央委員、中国人民銀行党書記・副行長兼務、英国オックスフォード留学 20 期中央委員再任ならず(引退)
	王兆星 (1959)	中国銀行業監督管理委員会副主席	中国人民銀行	西安交通大学経済学博士
	黄 洪 (1960)	中国保険監督管理委員会副主席	中国人民銀行	西南財経大学経済学博士
	曹 宇 (1963)	中国銀行業監督管理委員会副主席	国務院弁公庁	南開大学経済学博士

副主席	周 亮 (1970)	中国銀行業監督管理委員会副主席	中央紀律委組織部	19 期中央紀律委員、20 期再任ならず (王岐山元秘書)
	梁 濤 (1962)	中国保険監督管理委員会副主席	国务院弁公庁	同済大学管理学修士
	祝樹民 (1960)	中国銀行業監督管理委員会副主席	中国銀行	復旦大学修士、江蘇省政協委員
紀検組 長	李欣然 (1972)	駐中国銀行業監督管理委員会紀検 組長	中央紀律委員会	19 期中央紀律委員、最年少中央紀律委員、20 期中央紀律委員 (再任)

注：氏名あとのかつこ内は生年。

7 表 中国人民銀行幹部一覧

	氏名 (生年)	就任年月	主な経歴	学歴・学位
書記・副行長	郭樹清 (1956)	2018 年 3 月	人民銀行-貴州省副省長-山東省長 19 期中央委員	南開大学・英オックスフォード大留学
行長・党委副書記	易 綱 (1958)	2018 年 3 月	北京大学-人民銀行副行長 (中央財經委) 19 期中央候補委員	米イリノイ大博士
副行長・党委委員	潘功勝 (1963)	2012 年 6 月	工商銀行-農業銀行-人民銀行	人民大学、英国ケンブリッジ大、米ハーバード。博士
副行長・党委委員	劉国強 (1964)	2018 年 2 月	中央財經-人民銀行長助理	廈門大学
紀律検査組長・党委委員	曲吉山 (1966)	(2022 年 11 月)	中央紀律委員駐教育部紀検組など歴任 (紀律委系統)	理学修士
副行長・党委委員	宜昌能 (1967)	2022 年 10 月 (就任判明)	前国家外為管理局副局長	金融学博士

注：中国人民銀行ホームページより、2022 年 12 月 1 日現在。

IV 習近平 3 期目を支えるリーダー Who's Who

1. 「70 後」リーダー

IV-1 表 31 地方における「70 後」リーダー

	対象者数	具体例	兼務職・主要経歴
北京市	2	○楊普柏（常務委員・1973 年） ○夏林茂（常務委員・1970 年）	楊は、副市長
天津市			
河北省	2	葛海蛟（常務委員・1971 年） 趙 革（常務委員・1970 年）	葛は常務副省長（2022 年就任） 趙は省政法委書記、衡水市書記歴任。
山西省	2	盧東亮（常務委員・1973 年） 韦 韬（常務委員・1970 年）	盧は大同市書記 韦韬は太原市書記、副省長歴任。
内モンゴル自治区	1	黄志强（常務委員・1970 年）	黄は自治区政府常務副主席。
遼寧省	3	張立林（常務委員・1971 年） 張成中（常務委員・1970 年） 胡立傑（常務委員・1971 年）	張立林は副省長。 張成中は省委秘書長、盤錦市書記。 胡は省委組織部長
吉林省			
黒龍江省			
上海市	2	○諸葛宇傑（副書記・1971 年） 趙嘉鳴（常務委員・1972 年）	
江蘇省	3	○費高雲（常務委員・1971 年） 潘賢掌（常務委員・1972 年） 曹路宝（常務委員・1971 年）	費は常務副省長（2021 年就任） 潘は省委秘書長、福建省出身（廈門大学卒） 曹は蘇州市書記（南京市宣伝部長、塩城市書記歴任）
浙江省			
安徽省	1	張紅文（常務委員・1975 年）	張は副省長（2020 年就任）。

福建省	2	○崔永輝（常務委員・1970年） ○郭寧寧（女、常務委員・1970年）	崔は廈門市書記、湖北省荊州市長歴任。 郭は副省長、中国銀行出身（「金融副省長」）
江西省	2	呉 浩（常務委員・1972年） 任珠峰（常務委員・1970年）	呉は省組織部長、省党校長。省副省長歴任。 任は副省長（中国五矿集团出身）
山東省			
河南省	1	費東斌（常務委員・1970年）	費は省政府副省長、内蒙古烏蘭察布市長歴任。
湖北省			
湖南省	2	謝衛江（常務委員・1973年） 張迎春（女、常務委員・1970年）	謝は省委秘書長、副省長歴任。 張は副省長、湘潭市書記歴任。
広東省			
広西自治区	2	蔡麗新（女、常務委員・1971年） 孫大光（常務委員・1971年）	蔡は自治区政府副主席、共青团出身。 孫は宣伝部長、南寧市長歴任。
海南省			
重慶市			
四川省			
貴州省		○時光輝（副書記・）	
雲南省	2	劉洪強（常務委員・1973年） 邱 江（常務委員・1972年）	劉は昆明市書記。 邱は省委統一戦線部長。
西藏自治区	4	頼 蛟（常務委員・1972年） 任 維（常務委員・1976年） 普布頓珠（常務委員・1972年） 達娃次仁（常務委員・1972年）	頼は省委組織部長。 任は自治区政府常務副主席。 普は昌都市書記。 達は自治区党委秘書長。
陝西省			
甘肅省			
青海省			
寧夏自治区			
新疆自治区	2	楊發森（常務委員・1971年） 伊力扎提・艾合壳提江（常務委員・1975年）	楊はウルムチ市書記、伊力扎提・艾合壳提江は総工会主席。

注：○印は、20期中央候補委員。

2. 有望リーダ—Who's Who

諸葛宇傑 しよかつ うけつ Zhuge Yujie

【現職】 20期中央候補委員、上海市委副書記、上海市委秘書長、弁公庁主任

【生年・民族・出身地】 1971年5月 漢族 上海市

【入党年】 1992年6月

【学歴・学位・資格】 在職大学 工商管理修士 教授級高級工程師

【略歴】

1999年 上海港務工程公司總經理
2005年 上海洋山同盛港口建設公司總經理
2009年 上海市普陀区副区長（38歳）
2012年 上海国際港務（集团）有限公司總裁
2013年 上海市楊浦区長
2015年 楊浦区書記
2017年3月 上海市委秘書長、弁公庁主任
2017年5月 上海市委常務委員、市委秘書長、弁公庁主任
2022年6月 上海市委副書記、市委秘書長、20回党大会上海市代表
2022年10月 20期中央候補委員

【「70後」の有望リーダー】

港灣公司出身ながら、二つの区を歴任し、一挙に市委中枢に抜擢、最年少副書記。全国的にみても、将来のトップ候補の一人。

時光輝 じ こうき Shi Guanghui

【現職】 20期中央候補委員 貴州省委副書記、政法委書記

【生年・民族・出身】 1970年1月 漢族 安徽省阜陽

【学歴・資格】 同濟大学道路与交通工程系 高級工程師

【入党年】 1993年7月

【経歴】

1992年 上海市市政二公司
2006年 静安区副区長

2013年 上海市副市長
2018年11月 貴州省委常務委員
2019年3月 貴州省委常務委員、政法委書記
2022年6月 貴州省委副書記、政法委書記、20回党大会貴州省代表
2022年10月 20期中央候補委員（新任）

【将来のトップリーダー候補】

楊 普 柏 よう ふはく Yang Fubai

【現職】 20期中央候補委員 北京市委常委委員、副市長

【生年・民族・出身地】 1973年4月 漢族 湖北省江陵

【学歴・学位・資格】 西安交通大学電力系統及自動化専攻 工学修士 高級工程師

【入党年】 2003年12月

【略歴】

1987年 西安交通大学「少年班」（14歳）

1994年 南方電力聯営公司

2010年 南方電網貴州電網公司副總經理

2014年 中国南方電網有限公司副總經理

2017年 国家電網公司副總經理（44歳）

2018年 広西壮族自治区政府副主席

2020年12月 北京市副市長

2022年6月 北京市委常委委員、20回党大会北京市代表

2022年10月 20期中央候補委員（新任）

【“少年班”出身】

3. 中国人民銀行長候補者

易 会 満 えき かいまん Yi Huiman

【現職】 20 期中央委員、中国证券监督管理委员会主席

【生年・民族・出身地】 1964 年 12 月 漢族 浙江省蒼南

【学歴・学位】 杭州電子工業学院統計学専攻、杭州金融管理幹部学院銀行管理専攻
南京大学工程管理学院博士

【略歴】

1984 年 中国人民銀行杭州分行計画処

1985 年 工商銀行總行、杭州分行計画処副処長

1998 年 工商銀行杭州分行長

2000 年 工商銀行江蘇省分行長

2005 年 工商銀行北京分行長・党委書記

2008 年 工商銀行副行長

2013 年 工商銀行行長

2016 年 工商銀行董事長

2017 年 10 月 19 期中央候補委員（新任）

2019 年 1 月 中国证券监督管理委员会主席

2022 年 10 月 20 期中央委員（昇格）

【次期人民銀行長候補】

工商銀行北京支店長時代、業績向上に貢献、以後、行長、董事長を歴任、今日の工商銀行「中興の祖」。次期人民銀行長就任か？

朱 鶴 新 しゅ かくしん Zhu Hexin

【現職】 20期中央候補委員、中信集団董事長

【生年・民族・出身地】 1968年3月 漢族 江蘇省啓東

【学歴・学位・資格】 上海財經大学経済情報専攻 高級経済師、国务院特待生

【入党年】 1999年9月

【略歴】

1993年 交通銀行南通分行

2001年 交通銀行蘇州分行副行長

2006年 交通銀行南京分行長

2009年 交通銀行江蘇省分行長

2012年 交通銀行北京分行長

2014年 交通銀行副行長

2015年 中国銀行有限公司副行長

2016年 四川省副省長

2018年 中国人民銀行副行長

2019年1月 中信集団董事長

2022年10月 20期中央候補委員（新任）

【交通銀行で着実に昇進】

上海財經大学では、国家統計局長康義（20期中央候補委員、前天津市副市長）の後輩にあたる。
易会満に次いで、次期人民銀行長候補のひとり。

以上